



TITLE:

清代中期の杭州と商品流通：北新關 を中心として

AUTHOR(S):

香坂, 昌紀

CITATION:

香坂, 昌紀. 清代中期の杭州と商品流通：北新關を中心として. 東洋史研究 1991, 50(1): 34-57

ISSUE DATE:

1991-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154349>

RIGHT:

清代中期の杭州と商品流通

——北新關を中心として——

香 坂 昌 紀

序

一 主要流通経路による商品流通概況

二 北新關と商品流通

(1) 北新關税額と税則

(2) 北新關稅收狀況から見た流通商品

(3) 杭絹とその流通

結

序

明清時代、長江・淮河・大運河を始めとする内水面の主要水路、及び康熙二十年代の展海令によって開かれた沿岸航路を用いて、中國國內の商品流通は活潑に展開していたとみられる。例えば清代の北京には、廣東や福建等の遠隔地も含めた全國各地から、多様な商品が集中していたことが知られている⁽¹⁾。主要な流通経路の要衝に設置され、現に流通過程にある物資・船隻を対象として徴税業務を行っていた内國税關の存在も、活潑な商品流通の展開を示すものであろう。例えば康熙年間には國家の關稅收入は約百二十萬兩であったが、雍正年間には約百五十萬兩、雍正年間には報解慣習が定着した

關稅贏餘銀兩を算入すれば、雍正末年には約三百萬兩、乾隆十八年には正額・贏餘の區別なく四百三十萬兩ほどになり、嘉慶十七年には四百五十萬兩前後に達している。⁽³⁾ 稅率や制度の變化はあるものの、以上の關稅收入の増大は、流通商品量の増大を一應示す指標と考えることは可能であろう。

常關の大部分は戸部所屬の戸關で、戸關の關稅收入は戸部に解送され、その重要な收入項目となっていた。例えば、嘉慶十七年には地丁項下の收支は凡そ二百五十萬兩の不足となったが、四百七十七萬兩の鹽課、及び四百八十一萬兩の關稅收入があつて、地丁項下の不足を補ったほか、五百萬兩ほどの實質收入を戸部は確保し得たのである。⁽⁴⁾ 清朝國家權力の中樞たる中央政府が、その權力を支える財政基盤を、鹽課・關稅という直轄財源に大きく依存していたことが知られる。

所で、清代にあつては國家の關稅收入は、流通過程から吸い上げられる公私の收奪の十分の一程度という見方が屢々見られる。例えば、馮桂芬の「罷關征議」には、「大抵、田賦の數、民の出す所の者二三、而して國の入る所の者一。關稅の數、民の出す所の者十、而して國の入る所の者一」とある如くである。⁽⁵⁾ この數値は直ちに採り得るものではないにせよ、あながち荒唐無稽とも言えない。例えば、康熙二十四年蘇州北西の滄墅關を通りかかった吳震方は、商民を苦しめている誅求の實狀を上奏しているが、その中で樅頭稅が正規の稅則の十倍前後も多く取られていると述べている。しかし吳震方の言う正規の稅則なるものは、現行の徵收の額であつて、實は正規の稅則の約二倍であつた。⁽⁶⁾ 従つて、吳の傳える實態は正規の稅則の二十倍前後ということになる。この他に多くの陋規もあったから、商民の負擔が過大であつたことは疑いない。また、各常關には一種の通關業者が寄生しており、清初の蕪湖關の「保家」の例では、關の胥吏と結託して正課一兩に二・三兩から四・五兩を收奪していたといふ。⁽⁷⁾

以上の例からも知られるように、國家の關稅收入をはるかに上回る部分が、現に流通過程より吸い上げられ、國庫に入ることなく中途で消失したことは確かであろう。雍正年間に淮安關監督であつた慶元は、正額を完遂した上に多大の贏餘を報解し、さらに十七・八萬兩ともいわれる多大な私得中飽をなしたと追求されている。⁽⁸⁾ 關差缺が美缺として争競して求

められた所以である。それは本人にとどまらず、一族をも霑し得るポストとされていたし、康熙末年までは出来るだけ多くの人を均霑すべく關差の任期は一年とされていた。又、任期終了後は、その恩恵に對して報效すべく、公務を割り當てられる場合もあった。⁽⁹⁾關差以下、家人・胥吏・關役等の關の構成者から保家等の「環關して居する者」に至るまでが、幅廣く流通過程からの收奪を行なっていたのである。

さて、假に前の馮桂芬の理解に従うならば、乾隆・嘉慶期の關稅收入の四百數十萬兩は、その背景にその十倍ほどの四千萬兩という巨額の收奪が存したことになる。清朝政府の當時の總收入に匹敵する數値である。このことは當時の商品流通が、かかる巨額の收奪を、少なくとも結果的には負擔し得るほどに隆盛であったことを示すものであろう。しかし、かかる收奪が流通全體にとっては大きな制約・阻害要因として機能したことは當然である。加えて、流通過程から吸い上げられた可能性のある四千萬兩という額は、當時毎年流通していた商品の總量の金額から見れば、その一部分ではないはずである。今、全く假にその比率を十分の一度と假定するならば、各關が把握していた流通商品量に限れば、それは凡そ四億數千萬兩ということになる。勿論、「過關徵課」の原則に見られる如く、⁽¹⁰⁾狹域の所謂「關内流通」のように、關口を通過せず従つて納課しない商品や、免課對象たる零細肩負の商貨等もあったから、實際に流通していた商品の總量は、これを相當に上回っていたことは確かであろう。假定のうゑに立つ數値ではあるが、商品流通の展開を示す一つの指標として試算してみた。

相當の巨額に達していたと思われる毎年の流通過程にある商品の總量は、當時の社會が商品流通を一つの軸として展開していたことを示すものであろう。換言すれば當時の社會の經濟構造が、全國に及ぶ廣域の、及び各地域内の狹域の商品流通の存在を前提として構築されていたものと考えてよいと思われる。従つて、少なくとも明清時代の社會・經濟面を考察する場合、この商品流通の實態を考察することは重要な意味を持つと考えられる。しかるに今日までの間、商品流通の分野は、必ずしも十分に追求されてはこなかった如くである。勿論、安部健夫氏の「米穀需給の研究」や重田徳氏の「湖

南米流通市場の研究」といった先驅的研究や、最近の則松彰文氏の「清代中期の浙西における食糧問題」といった成果があげられてはいるものの、主要食糧以外の一般商品の流通や、具體的なある地域・地點を指標とする商品流通の實態解明は、やがて全中國の商品流通を解明するためにも、積み重ねていくべき課題であると思われる。この觀點から、筆者は前に蘇州北西郊に位置する滄墅關、大運河の要衝の淮安關の關稅收入狀況の變動とその要因から、いかなる商品がどれほどの量流通していたかについて考察したことがあった。⁽¹¹⁾ 現實の流通過程を對象とする關制は、商品の流通過程を追求する上で有効な手がかりたり得ると考えたからである。

本論は以上の淮安關、滄墅關に關する考察をふまえて、大運河最南端に位置する杭州省城北郊に位置する北新關の機能狀況から、該地の廣狹域に互る商品流通の實態の一端について考察せんとするものである。⁽¹²⁾

一 主要流通經路による商品流通概況

大運河最南端に位置していた杭州の地は、大運河によつて華北・華中・華南地方に直結し、長江・淮河・黃河・衛河といった主要河川の流域とも連結しており、さらには錢塘江水系の商品流通の結節點でもあった。北新關志には「上は閩・廣・江西に通じ、下は蘇・松・南京・遼東・河南・山陝等の處に及ぶ。」⁽¹³⁾ と言ひ、全國的商品流通網の中に位置づけられていたのである。従つて、杭州地方の商品流通を追求する場合にも、全國規模の商品流通との關連において理解しなければならぬ。先づこの點を概觀しておきたい。

中國國內の商品流通に用いられた海運以外の主要經路としては、大運河を始め、長江・淮河・錢塘江・珠江といった河川があげられる。流通過程にある商品・船隻を對象とする徵課業務を擔當する各常關が設置されていたのも、これらの流通經路沿いの交通要衝地であつた。例えば、大運河には、主なものだけでも北から天津關・臨清關・淮安關・揚州關・滄墅關、そして終點最南部には北新關が設けられていた。又、長江には本流に夔關・九江關・蕪湖關・西新關が設けられ、

支流部には鄱陽湖に流入する贛江沿いの贛州府に贛關が設けられて、華中—華南ルート及び福建—江西—廣東ルートを扼していた。珠江には上流の廣西省の梧州・潯州に梧・潯の二廠が、支流の北江上流に華中—廣州ルートを扼する太平關、最下流部には海關でもあった粵海關が設けられていたのである。

大運河中部には當時黃河が流入しており、淮河と合流していた。従つて、淮安附近の清江浦は、黃河・淮河・大運河の三大水路が集中し、これを掌握するために淮安關が設置されていたのである。淮河の中流部には鳳陽關が設けられ、同水系を用いて上下する物資・船隻を扱っていた。

これらのルートを上下していた商品の流れのうち、大運河・長江・淮河に依るものについては、以前に若干考察したことがあった。⁽¹⁴⁾その後に入手した史料を補いつつ、行論に必要な範圍で引用したい。なお、利用し得る史料はほぼ乾隆代前期に限られているが、これには次の如き理由がある。

即ち、雍正年間には、各關が毎年の報解を義務づけられていた額（正額）の他に、正額を超えて得られる部分を贏餘（⁽¹⁵⁾盈餘も同じ）とし、これを内庫に報解する制が成立した。雍正末年には正額を超えた百五十四萬兩にも達するが、乾隆年間に入ると各税關の贏餘報解額は漸減し始め、基準とされた雍正十三年の數値を満たし得ない關が多出した。このため乾隆十四年に、雍正十三年の數値をもつて贏餘の定額化が實施されたが殆ど實効性はなかった。ただし、贏餘額が前年に比して減少した場合、相當詳細に減少理由の追求がなされ、商品の種類や税額が史料に明示され、流通の實態の一端を考察し得るようになったのである。しかし、乾隆四十三年には前三年の數値と比較し、減收部分を管關者に辨濟せしむることとなり、減少理由の追求はあまり意味を持たなくなつたためか、流通の實態を示す史料も少なくなる傾向がある。

筆者の以前の考察によれば、大運河の商品流通については、乾隆前期の淮安關の場合は、課税對象とされた商品々税貨々の動きに關する限り、北上の流れに比して南下の動きが壓倒的に多く、中でも黃河・淮河・運河によつてもたらされる山東・河南産の豆貨が中心で、江蘇省北部・安徽省北部産のものもこれに加わる。この豆貨が第一であり、淮安關稅收

約五十萬兩のうち、凡そ六十パーセント前後に達している。この豆貨の大部分は淮安から大運河にのって南下したと見られる。また、同じく南下の物資である梨棗は稅收の十七パーセント前後を占めていたと推定される。この二項だけでも全稅收の八十パーセント近い數値となる。一方、明らかに北上商品と思われるものに、紬緞布疋類があるが、淮關稅收の僅か二・五パーセントを占めるのみであり、同じく北上商品たる砂糖・紙類は一・七パーセントであつて、兩者合わせても四パーセント前後に過ぎない。従つて淮關の課稅對象たる稅貨に關する限り、商品の主要な流れは「南下」であり北上の流れは微々たるものといふことになる。最大の稅收項目をなしていた豆貨は、淮關稅率からみれば、凡そ五く六百萬石にもなる。淮關段階でのこの多量の豆貨は各地での消費にまわされてその數量を減らしつつ南下し、揚州關・由閘を経て、長江を下つてくる豆貨等を併せつつ、さらに大運河を南下して濬野關を経て蘇州に販運される。又長江南下の豆貨は、蕪湖關段階で凡そ三百萬石であり、年間約二千隻の豆船が東下していたことが知られる。

蘇州濬野關にあつても、乾隆代前期の該關の稅收は、南下して販運される米豆に主に依存し、その額は米豆各々三百萬石前後と試算した。なお、豆貨の主要部分は豫東二省の豆貨であり、これに湖廣地方の豆貨が加わる。ただし、この數値は乾隆朝宮中檔第八輯までの限られた史料により推定した試算値であり、その後に入手した史料によれば、濬野關段階では米が凡そ六百乃至七百萬石に達していたものと思われる。豆貨は雍正十三年頃、凡そ三百萬石であつたが、乾隆四十二年には百四十萬石程度と推定される。⁽¹⁶⁾この大量の米穀と豆貨の一部は、さらに大運河を南下して杭州省城に至り、浙江各地及び福建等の地方へと販運されていったはずであり、米については年間二百乃至三百萬石といわれている。⁽¹⁷⁾米豆麥等の主要食糧は、流通する數量においても各常關の稅收の上でも、最も重要な物資であつたことは明らかであるが、本論で直接取り上げることはせず、特に豆貨の流通については改めて考察したいと考えている。理由は、北新關稅則では米麥豆類の主要食糧は課稅對象とされていないため、本論とは別系統の史料に依らざるを得ないこと、及び米については既に先學の研究があることの二點による。

ここで杭州と密接な關係のあった主要水路のうち、錢塘江について簡単に觸れておきたい。錢塘江は支流新安江が直接安徽省東部に通じ、上流の衢江には一部陸運區間を挟んで江西、福建地方へのルートが通じており、東南三省に連なる重要流通経路であった。この河川は河口部が水深が浅く、海潮の干満の差が逆行するため、河から海に直接出ることは極めて困難であった。従つて、この河川の水運は、省城南部の閘口や江干といった河港を中心とし、そこから上流にかけて行なわれていた。しかも、水位差から大運河から南に伸びる小水路とも直續していなかった。このため、大運河・錢塘江間の流通は、その間に杭州省城を挟んで行なわれ、船隻の積み替えを必要としたのである。この他に地方的な重要水路も四通八達しており、これらの水路の要衝と省城内外には、大關の他に七務六關十門八口址といわれる北新關の諸分司が配置されていたが、これについては拙論を參考いただきたい。⁽¹⁸⁾

二 北新關と商品流通

(1) 北新關稅額と稅則

大關以下の七務六關及び八口中の二口によって吸い上げられた貨稅・商稅・船料は大關で集計され、正額なる定額の確保義務額が戸部に送られることになる。本來流動的な現實の商品流通から引き出された關稅收入であつたから、これ自體年次・季節によつて變動し得るはずであるが、各關と中央との關係では、これを一定の正額として報解を義務づけていたのである。これは中央の一定額確保の必要性から出たものに他ならず、正額自體は、必ずしも現實の流通關係に正確に照應したものではなかつた。しかし、特別の理由の無いかぎり、關の設置地點の平均的な商品流通量が、正額を決定する基準になつていたことは確かである。そこで先ず北新關稅額とその變遷について検討したい。

北新關志・卷四「課額」によると、明初七稅課司局の原額は凡そ二百三十九萬貫であり、北新鈔關設置後、弘治元年には船鈔の折銀額は毎年四千餘兩であつたという。この時の折銀率は銀一兩鈔七百貫である。正徳六年に北新鈔關が商稅をも兼收することになり、嘉靖以降は漸増の傾向が顯著となる。嘉靖初期の八〇九千兩が二十三年には三萬餘兩となり、萬曆三十九年には四萬九千七百餘兩、天啓元年に二萬兩、六年にさらに二萬兩が各々加増されるなどして、明末には十一萬二百四十兩に至っている。清朝になると明末加増分が裁汰され、毎年の額解の銀は八萬九千三百七十六兩となつた。順治五年には、北京の戸部寶泉局・工部寶源局の銅錢鑄造の原料銅確保が命ぜられ、十三年・康熙二十年・二十五年などに數次にわたつて辦銅のための銅勛銀・水脚銀が加増されて、康熙二十五年には十二萬三千五十三兩に達している。⁽¹⁹⁾なおこの年の關稅收入全體は約百二十一萬兩であるから、北新關はその一割ほどを占めていたことになる。康熙末年より贏餘銀報解が始まり、雍正に入ると慣習として定着し本格化していくが、これは正額贏餘を併せた稅收が、現實の商品流通狀況に或る程度照應するようになったことを意味する。北新關贏餘額は乾隆前期には大體四〇五萬兩前後で推移し、後期には六〇七萬兩になつてゐる。乾隆十八年には正額・贏餘併せて、約二十二萬兩前後に達するが、清代關制の上では稅額から言へば中規模關ということになる。

しかし北新關の場合、この數値が、ただちにこの地方の流通量の規模を示すものではない。即ち、北新關の稅則によれば、商販の米麥豆等の主要食糧に對する貨稅が免除されていたからである。ただし、商販の米麥豆船の船料は徵收されていた。しかし、その額は貨稅に比べるとはるかに小額である。乾隆代前期から後期にかけて、浙甯關の場合は稅收の半分程度を米稅が占め、六〇七百萬石ほどに達してゐたと思われる。このうち、凡そ二〇三百萬石が浙江にもたらされたというから、浙甯關稅率を當てはめると、凡そ、八萬から十二萬兩に相當する。加えて蘇州からは相當量の豆貨が販運されてゐたはずであり、稅額で數萬兩前後に達してゐた可能性がある。これを算入すれば北新關も稅額の上では浙甯關・淮安關といった大關に近づく。注意すべきは北新關稅額が、全て主要食糧を除いた一般商貨から得られてゐたことであつて、他

の大關の一般商貨分に優に匹敵する數値を示している。ただし一般商貨の全てが關の把握對象となつていたわけではない。以上により、杭州の地を中心として、他の地域に勝るとも劣らない活潑な商品流通が展開していたことが知られるであらう。

關における徵稅は、原則として戸部から頒たれる徵稅科則に従つて行なわれることになつていた。しかし、現實には序に引用した例に見られる如く、寧ろ科則に依據しない徵稅が一般的であつたとみてよい。商民は一般に科則を超えた正稅・各種の附加稅・多様な陋規を收奪されていたのであるから、科則を検討することにあまり意味はないかも知れない。しかし、次の諸點を讀み取ることは可能である。1、關設置地域を流通する商品の種類。ただし、例外的な免稅品もあり得る。2、各種商品の平均的價格。貨稅は原則として「物價の高下を以て準と爲し」て定められて一種の從價稅であり、商品によつて異なる課稅單位ごとに稅銀數で示されている。その稅銀數はその商品の價格に或る割合を乗じて算出されるが、その割合は一定してはいない。例えば、米は概して一石銀四分で平均的時價の三十分の一度度であるが、中絲は一・三パーセントと率が大分小さくなり百分の一度度と思われる。しかし、率が判れば稅銀から平均的時價を逆算することは可能なのである。

さて、北新關の稅則は北新關志・卷十三「稅制」に示され、雍正年間に總督李衛の命によつて定められた稅則であり、雍正初期の制である。それ以降の稅則の變化については、その後の關志編纂が爲されていないため不明である。その稅則は物資・商品を凡そ十七類に分類し、各類ごとに數十前後の商品名と課稅單位及びそれに照應する稅額とを定めたものである。第一にあげられているのは、杭州を代表する「緞綾羅紗布疋類」であり、上緞等十五種の緞・紬・布類が「每疋銀五分五釐二毫」とされ、以下「疋・丈・段」を課稅單位とし、銀額で全三十六段階、品種名で凡そ百二十種の名稱があげられている。その中で産地を特定できるものとして、溫紬・寧紬・湖州帳羅・濮院紬・王庄紬・盛澤（輕紬・綾）・福建銅版布等がある。著名な盛澤鎮産の綾・紬が杭州省城に南下している點は注意される。恐らく錢塘江によつて、江西・福

建・廣東・安徽等へと流通していったものと思われる。なお、杭州地域での多様な織物の名稱は、全てを正確に區分理解することは極めて困難であり、『杭州市經濟調查』なる民國二十年前後の調査によつても、⁽²¹⁾「綢緞の種類繁多にして辨析するに易からず」と稱されている如くである。次いで、税則の第二類は「絲線花麻類」であり、中絲每百斤八錢五分七釐六毫を始め、三十五種程度の纖維類につき、十三段階に分けて税額が示されている。土絲每百斤六錢四分・蠶綿每百斤四錢二分八釐八毫・生絲線每十斤一錢四分七釐二毫などが杭城の主産業たる絹業に關係深いところであろう。なお、土絲とは省城近郊や周邊諸縣で産出される生絲のことであり、北新關の稽查や徵税を避けるために多様な手段を用いて城内に不法に持ち込まれた物品の主要部分を占めていたと考えられる。⁽²²⁾以上の二類は杭城の主産業と十分な關連がある物資であるために、やや詳細に紹介した。その他の十五類については、杭城の特産品もあり、また杭州に出入する商品の大部分の名稱が示されていると思われ、この點で重要と考えられるが、繁雜に過ぎるので省略する。なお、全十七類の科則には全部で千種以上の商品の名稱があげられている。

(2) 北新關稅收狀況から見た流通商品

杭州省城に不斷に出入し、北新關の稅收を支えていた千種を超える多様な物資・商品の流れの總體を、正確に把握することは極めて困難である。例えば『杭州市經濟調查』によると、民國二十年頃、該地の主産業たる絹業の原料の生絲は、地元産だけでは不足し、他地方からの供給に依存しているにもかかわらず、この地方から生絲が相當に他地方に流出している實態が報告され、流通が單に需給關係によつてのみ成立しているのではなく、價格の地域差や取引慣行等々の要因も絡み合い、現實の商品流通關係が極めて複雑な様相を呈していることが指摘されている。⁽²³⁾

この複雑な商品の流通過程を對象として、徵課業務を行なっていたのが戸部所屬の北新關と工部所屬の南新關であった。工關たる南新關は、建築資財や日用品・工藝品の原料たる竹木類を對象とし、戸關たる北新關はそれ以外の一般商品

を課税対象としていたが、全ての商品の流通を完全に把握していたわけではない。それは、徴税科則に除外されている物資——例えば北新關の場合、米麥豆等の主要穀物——や、一定限度以下の零細規模の商品流通に對する課税を免除する原則があったほか、吊城墜貨を始めとする各種の脱漏税行爲が盛んに行なわれていたからである。⁽²⁴⁾ 一般に、各常關の捕捉率なるものは、決して高いものとは言えなかったようであり、北新關の分司の臨平稅課司局の例では、該地の主要產物たる輕紬は毎日二—三百疋の生産があつたにもかかわらず、五日毎の捕捉數は僅かに十數疋程度で「分運偷漏甚だ多し」と稱されているほどである。⁽²⁵⁾ 水路が四通八達し、流通を掌握しにくい該地の特殊性にも因るものと思われ、この率を全てに適用する譯にはいかないが、關による流通把握が完全なものとは程遠かったことを示す例になるであろう。従つて、關稅收入より見た商品流通量は、そのミーマムの數値を示すものと解さねばならない。

しかしながら、現實に關を通過する場合の商民の苦痛は相當のものであり、北新關の場合を例にとれば次のようなものがある。即ち、陳春曉の「杭關の吏」なる詩には「杭關の吏、關の南北に踞守す。南北に兩關を設け、權使に專職あり。兩關の設は通商の爲なるに、往來の行人、何ぞ戚々たる。過關、杭關の難きに如くはなく、道路に言あるも齊しく嘆息す。……」とあつて、過關の困難なことが示されている。兩關とは北新關・南新關を指す。詩は續けて、多くの商品を持つてやってくる「富商巨賈」には、關稅を「自輸」するを聽し、その結果「百に僅かに一を科す」だけであつて聖恩が溢れているのに、「一葉の扁舟」でくる零細な商民に對しては、虎の威を假る狐のごとき衆胥は、收奪を恣にし、「纖悉零星も一網にして收め、罰するに偷漏を以てし、客煩憂す」と、強者が有利に關を通過でき、弱者が收奪にさらされている様相が示されている。⁽²⁶⁾

より多くの商品を動かしていたとみられる富商巨賈が、より有利に過關し得たとすれば、關稅收入は現實の商品流通をどの程度反映しているかという疑問が生じるが、これに替わる史料が求められない以上、關稅收入は實際の流通量のミーマムの數値を示すものという理解に立つて論を進めていくしかない。

ではミニマムの商品流通量を示している北新關の實際の稅收は、どのような商品によって支えられていたのであろうか。北新關志には城南務の機能に關し、「城南は江西・廣・閩の通衢なり。凡そ北關の稅貨、多くは此れに由る」とあり、北新關の稅收の重要部分が錢塘江水系によって販運される江西・福建・廣東等の商品に依存していたことが示されている。では、こういった商品に支えられていた北新關の稅收は、現實にどのような變動を示していたのであろうか。正額等が固定されているため、稅收の變動とは贏餘の額の變動と等しい。宮中檔乾隆朝奏摺から求め得たのは、乾隆十六年から五十年までの間に、十九年分であり、上三年數との比較から計算して得た數値もあるから、毎年必ず報告していたはずの奏摺が完備している年次はさらに少ない。これは宮中檔乾隆朝奏摺の缺落の度合いを知る一つの手がかりとなるであろう。さて北新關の稅收狀況が前年より減少し、その理由が調査された例は、知り得た所では乾隆十六年に一萬二千餘兩・十九年に八千六百餘兩・二十一年に二萬六千餘兩・三十年に一萬七千餘兩の四例のみである。乾隆四十三年以降は贏餘の前年比較に加えて、三年前までの數との比較制が採られ、著しく減少があった場合には管關者に辨濟責任が課せられるようになった。このために、それ以降の數値は注意深く意圖的に前年數を若干超えるような操作が行なわれたものとみられる。奏摺内容も定型化し、事務的かつ無味乾燥な感が強い。

さて、以上の數値は絶對値が小さいだけではなく、變動の幅も決して大きくはない。その理由は、前述の如く他關にあって稅收の大半を占め、稅收變動の主因となっていた主要食料が、北新關では免稅されていたためと思われる。それでも前年に比して贏餘減收の際には、その原因が調査されているのであって、商品流通狀況の一端を垣間見ることができる。以下この點について考察したい。

乾隆十六年、前年に比して贏餘が一萬二千餘兩減少した。その理由として浙江巡撫の覺羅雅爾哈善は、春閒に雨水過多

で貨船が希少であり、夏秋には亢旱のため河道が淺涸となり、貨物の運載が困難になったこと、及び溫・台・衢・嚴等の府が偏災に遇い、産貨が少なくなっただけでなく、災害による購買力の低下のために商品が賣れなくなり、流通量も減少したことを挙げた。⁽²⁸⁾しかし、どの項目が減少したかを調査報告するを命ぜられ、「經徹底簿」を詳細に検討して次のような報告をした。一・大關徵收の商烟・紬緞・布疋・雜貨等の税が、前年に比して四千五百十五兩ほど減少している。二・茶税は二百七十二兩減收。三・船料は二百六十二兩減收。四・七務六關二口の（零星な雜税）税・料等四千六十四兩ほど減少。五・倍税十四兩減少。六・區行季鈔猪羊便商桔栝等は七百十二兩增收。その結果全體では八千四百十五兩ほど減少した。また、從來南新關の正額不足分を北新關贏餘から補填していたが、前年は三千七百餘兩が返還された。その分は今年はない。以上の理由によって一萬二千百十七兩の贏餘減少を生じたのであると稱し、徵多報少の事實はなく、缺損の背景は前奏と同じであると報じたのである。⁽²⁹⁾前記四は北新關の諸分司たる七務・六關と徵税を行う二口とが徵收する貨税と船料である。五は脱税摘發の際に課せられる二倍の罰銀である。

この中には注意すべき點がある。先ず、大關の税収を支える税貨に課税される商品として、商烟が紬緞や布疋と共にあげられていることがある。次いで第二に、報告された各項目は零細な數値まであげられていること、及び增收項目も示されていることからいえば、北新關の税収項目の恐らくは全てをあげているものと思われる。何故ならば流動的な商品流通を對象とする關稅收入は、收入額自體流動的なはずで、前年と全く同額となる可能性は極めて少ないと見られるからである。又、偏災を蒙った地方はあるものの、運道阻滯による影響は全ての商貨が一様に受けたはずである。このように見ると、前年より減少した贏餘額八千四百十五兩に占める減少項目の比率は、該年における全稅收中に占める各項目の稅額の比率に或る程度接近しているともできよう。該年の全稅收は十八萬九千九百兩程度と見られるから、先の比率を適用すると、商烟・紬緞・布疋・雜貨等は凡そ九萬兩前後、茶税・船料は各五萬六千兩、諸分司稅料が八萬九千九百兩ということになる。勿論正確なものではないが、稅收を支える各項目の稅額を知るための一應のメドとしておきたい。

次いで乾隆十九年、北新關贏餘は前年より八千六百四兩減少した。理由はこの年河工石料の運搬に淮揚等の地方の船隻が動員されたため、南北往來の雜貨等の船が稀少となっていること、及び前年に烟葉が薄收となり、加えて今年の蠶絲の收成が悪かったため「烟稅」と「絲稅」が前年より少なくなっていることの二點である。⁽³⁰⁾これに對しても減少の項目と數値の再調査が命ぜられたと思われるが、その報告は宮中檔には見られない。烟葉の流通量減少が贏餘減少の理由とされていることが注意される。烟稅が絲稅とならんで重要稅目の一つとなっていたことを示すものであろう。

乾隆二十一年には、北新關贏餘は前年に比して二萬六千四十兩減少した。當時浙江地方は甚だしい米貴に苦しみ、一石三兩前後に達したほどである。⁽³¹⁾救済のために江廣の商販を誘致すべく、米穀供給路の常關の米稅を免除する措置がとられた。北新關は元來貨稅としての米豆麥稅は徴していなかったが、米船船料は徴しており、この時は米船の船料を免除したのである。二十一年の贏餘短少理由の調査も、この免過した米豆船料の額數と、何の項目の貨物の稅收が減少したかを報告させるものであった。その結果、乾隆二十一年二月十一日から八月二十九日までの間の米豆船の免過數は、約千十四兩、又、烟稅の減少は正額が一萬千五百五十餘兩、加一耗銀が千百五十餘兩であることが判明した。その他については絲茶雜色貨物の正稅は各々減少すること「一ならず」とあるだけで詳細は不明である。⁽³²⁾

この記述から知り得ることは次の二點である。第一に免過米豆船料であるが、北新關の船料は、船式によって六類に分けられ、各類ごとに標頭の丈尺によって銀額を定めている。各類の最大の船隻の標頭でも一丈四尺に過ぎず、その稅額も最高一兩六錢程度にすぎない。⁽³³⁾これを潯墅關の則例（雍正三年からは深・廣・長の三要素により積載量を石で計算し、每石當り商

品の種類によって稅額を定める。雍正三年以前は標頭丈尺に依る。貨稅を船料に含め、船料として徴收していたのである。）に比べると、潯墅關の場合は標頭も最大は一丈八尺であり、稅額も比較にならないほど多額である。⁽³⁴⁾北新關は、貨稅と船料を別々に徴收していたため、主體は貨稅であり、船料自體はかなり少額であった。さて、北新關の最大標頭の丈四の稅銀一兩六錢で、免過米豆船料銀數を除すと、大體千三〇四百隻となる。二月から八月までの約半年間の、しかも米貴の時という條件

はあるが、杭州に載來された米船數を知る一つの指標にはなるであろう。なお、杭州へ載來された米穀は、湖廣・上江・江西等の地方から千石以上もの大船によって蘇州に載來されたもので、取引地たる楓橋等の地からは、數百石ほどのやや小型の船で杭州に運ばれるのが通常の形態であつたという⁽³⁵⁾。この數百石なる數に依ると、約半年間の船料免過期間に杭州に載來した米石は凡そ四十萬石ということになる。

知り得る第二點は、烟稅である。烟葉が北新關の主要な稅貨の一つであつたことは上の三例によつても知られる所であるが、その量についてもこの例によつて多少検討し得る。即ち、北新關の稅則（關志・卷二三・稅則「大關寬減條例」）によると、烟は每百觔稅銀四錢六分であるが、福建永豐の烟葉は三錢二分と寬減されている。理由は不明であるが、永豐の地が福建省南部の漳州府という遠隔地にあることを配慮したものと思われる。又、杭州の北部の塘棲鎮の土烟は一錢四分と優遇されている。蘇州等へ直行せず、省城への販運を促すための措置であろう。さて、以上二つの特例が適用される烟葉の數量は知り得ないし、後述の如く烟葉は江西・福建產のものが多かつたというから、假に全てに四錢六分を適用すると、減收分は凡そ二百五十萬觔ということになる。この部分が減つたというのであるから、前年はこれを相當に、或いは若干上回つた量が北新關稅收を支えていたはずである。假にこの年の流通量が前年のそれより半減していたとすれば、前年は五百萬觔ほどもあつたことになり、前年に比べ一割減少したと假定すれば、前年は稅額にして減少分の十倍の十一・二萬兩、數量としては凡そ二千五百萬觔という數値が得られる。しかし、常識的にいえば、二・三割減といった所が妥當な所ではあるまいか。とすれば、前年の烟稅額は三・四萬兩から五・六萬兩、數量は八百四・五十萬觔から千二・三百萬觔ということになる。減少率が不明なので、はっきりしたことは判らないが、凡その見當にはなるであろう。なお、前年の量が異常に多かつたという指摘はなされていないから、前年の數値なるものは通常年の數値にほぼ等しいと見てよいと思われる。錢塘江を下つてもたらされる商品が北新關の稅貨の主要部分を占めていたとされるが、その中でこの烟葉が重要な地位を占めていたことは確かであろう。

更に事例を検討しよう。乾隆三十年にも贏餘が前年より一萬七千五百十兩減少した。理由として挙げられているのは、一・前年に秋冬の雨雪不順で河道が乾淺となり、船運困難のため船隻の往來が稀少となった。二・柏油の收成が數薄であった。三・前年福建・江西産の烟葉が不作で價格が騰貴し、販運者が少なくなった。この三點である。⁽³⁶⁾二項の柏油とは、ハゼの實を搾って得た油のことで、蠟分が多く蠟燭の原料として、錢塘江中・上流域で盛んに栽培されていたという。⁽³⁷⁾上記三項の烟葉は福建産に加えて江西産のものも載來されていたことが、この史料で知られる。

この報告については詳細な再調査が命ぜられ、その結果「日征底簿」を査驗し次の如き報告がなされた。關務を二十九年五月一日から二十六日まで暫署した巡撫熊學鵬の任内には贏餘銀三千九百二十四兩の短少となり、五月二十七日から三十年三月三十日まででは西寧の任期で、この間の短少贏餘銀は一萬三千五百八十六兩に當たっている。熊の短少理由は、五月は新絲登場の時であるのに前年の天候が遅れていたために、新絲の出荷が遅れて價格が高く、従つて紬綾等の價格が貴くなつて商客は稀少となった。本來、絲斤紬綾等の税は變動するものであつて、捏飾の事實はないともいう。一方、西寧任内の短少の理由は、河道乾淺による商販稀少の他に、福建・江西二省の烟葉が共に歉收に屬し、「價值が昂貴したため、販運して浙を過ぐる者甚だ少なき」ことに因るとし、前半の「日徹底簿」を調査して、烟葉の少收分は一萬千二百餘兩、柏油の少收分は二千三百餘兩、その結果一萬七千五百十兩の贏餘短少を生じたことを報告し、承認を得たのである。⁽³⁸⁾前年に比べた烟税の減少部分は、前の二十一年の場合とはば同様であり、先の推定が適用できるであらう。

これ以降、乾隆末年に至るまでの北新關稅收を報ずる乾隆朝奏摺には、稅收の内容、構成を傳えるものはない。従つて、これまで税目として出てきた商品としては、紬綾・布疋・烟葉・柏油・雜貨といった項目のみということになる。とりわけ、杭州を代表する産物の紬綾等の絹織物が、年次による増減があるといわれながら烟葉・雜貨等と一括してあげられるのみで、稅收増減の大きな原因とはみなされていない點は注意される。これは紬綾類に對する正稅の額が相當に低く⁽³⁹⁾設定されていたことに因ると思われる。即ち、北新關稅率によると、上緞・線紬でも稅額は每疋五分五釐二毫であり、十

萬疋でも五千餘兩に過ぎない。假に流通量が二割減少しても、稅收は僅か千餘兩減るだけである。稅率は恐らく百分の一度程度ではなかったかと思われる。この他後述する所であるが、課稅されずに關を通過した場合が相當にあったはずであり、杭州の紬緞類は北新關稅收増減の主因にはなり難かつたことも理解できる。

(3) 杭絹とその流通

その稅率が比較的低かつたこともあつて、北新關の稅收變動の大きな要因になつていなかったと思われる絹織物は、その故もあつてか、乾隆朝奏摺中の北新關關係史料にはあまり多く見られない。僅かに「紬緞布疋」の名稱が見えるが、その稅額も前引の商烟や雜貨と一括され、この三項で北新關稅額の凡そ半分の八〇九萬兩程度になつたと推測し得ただけである。また「絲斤紬綾等の稅、原と時に盈絀齊しからざるあり」とあつて、稅收が必ずしも安定していなかつたことを示すのみであつた。

しかし、この事は、北新關を通過して全國に販運された絹類が些少であつたことを意味するものではない。前述の如く北新關の稅則では、第一に緞綾羅紗布類があげられ、その稅額が明記されているが、その種類は全部で凡そ百餘に及び、單に紬・緞・紗・羅・布といった品質の違いに加えて、同じものでも濮院紬・王庄紬の如く產地名が附せられて特定のブランド化したものも相當に含まれている。又、緞・綾・羅・紗・絹は各々上中下共に九折徵收、紬は紡紬のみが同率、上布以下十六種の布類は八折徵收とされており、中でも濮院・王庄の紬の大關に報納し閩粵江右にもたらされるものは五折徵收の特典が與えられていた。その理由はこれらの地に販運する商人は「大起」即ち大規模な商貨販運に當り、「航海越渡」は危險が多い。よつて「寛減」し「招來を示す」ためとされている。濮院紬については、浙江通志に記があり、嘉興府桐鄉縣濮院鎮で生産される花紡紬のことで、上質の故に著名であり「行商膺至す、終歳の貿易、數十萬金を下らず、居民此に藉て利を爲す」と稱される名産品であり、嘉興府から運河を北上し長江河口を経て海運される流通を減少し、北新

關・杭州・錢塘江ルートに誘致すべく、北新關關稅を輕減したものと思われる。前引の盛澤鎮の紬緞も、減免對象にはされてないものの、同様に南下して杭州を経て錢塘江水運によつて東南諸省に販運されたものであろう。

さて、これまで檢出した北新關關係史料では杭州の絹織物の流通狀況は知り得ないが、他關の史料によつては若干を知り得る。潯墅關については稅收の約四割をしめる「雜稅」の中に含まれていて、絹織物のみの稅額も數量も特定できないが、淮安關の乾隆二十年頃の例では、⁽⁴¹⁾紬緞布正稅は約三千兩の減收で、稅收の二・五パーセントに當る。淮安關稅率でこの數を處理し、全てを紗羅紬絹綾と假定すると、凡そ四十五萬疋、全てを布疋とするとその倍の九十萬疋となる。紬緞については二百四十斤を一驟とし銀七錢であつたから、これを適用すると、約四千三百驟、⁽⁴²⁾凡そ百萬斤となる。民國二十年、杭州市では五十五萬疋の紬緞を作るのに約一萬六千七千擔の原料絲を必要としたというから、單純計算すると一疋三斤となる。これを先の數に當てはめると、約三十萬疋となる。勿論淮安關課稅の紬緞布疋數では、一般大衆の日用の布疋類が壓倒的に多かつたと考えられるから、所謂絹織物の量は前の推定を相當に下回つていたであらうし、又、蘇州や江寧といった地域の絹織物もこれに含まれてはたはずであり、杭州產のものはその一部分ということになるであらう。大運河を北上してゐた商品の中には絹織物もあり、その中には杭州產のものも存在したであらうと推定できるのみである。

一方、杭絹は長江流域にも販運されていた。例えば、乾隆五十二年江寧府の西新關は稅收が減少したが、その理由は「蘇杭等の處より運到せる紬緞、並びに江寧出城の紬緞・雜貨より、以て猪羊牲畜等の項に及ぶまで、皆五十年と比較して數らず」というものであり、⁽⁴³⁾江寧の地に蘇州や杭州の紬緞が販運されていたことを示している。

斷片的ではあるが、大運河を北上し或いは長江を遡つて杭絹が流通し、各關の稅貨の一つとなつていたことが一應確かめられるのであるが、實は稅貨とならない形で流通していたものが相當にあつたと考えられる。

例えば、乾隆五十一年、江西の漕船の土宜に關連し、「今、過關する者有りや否や、京師の貨物、稍々流通するや否や」の諭旨を受けた天津關管理の徵端は、「伏して査するに、南省の貨物、京城の民間日用の必需する所なり。しかして

糧船の帶ぶる所、江浙の貨あり、江廣の貨あり。浙江の布疋絲線等の物、尙お客商自ら販載を行なうことあるも、惟だ江西・湖廣の竹木・磁器・紙・油等の物、全て漕船の攜帶に頼る」と答えている。ここに江浙の布疋絲線等の物が商販だけでなく、一定の限度内であれば漕船土宜として漕船に附載されて關稅を免除されて流通していたことが知られる。徵端は續けて、浙江各幫と湖南三幫の土宜が減少して、隨帶の貨物は往年の比ではないとし、その理由を「上年客貨の附搭、利なし。是を以て、本年、旗丁土宜を除くの外、攪載甚だ少なし」と述べている。⁽⁴⁴⁾これにより、漕船土宜には旗丁土宜と客商の依託を受けた攪載土宜の二種があり、後者は客商の利得の可能性の多少によって變動していたことが知られる。なお、この史料は京師民間需要の貨物が不足しないために、漕船土宜が途中で起卸されることを極力防ぐ趣旨であり、京師にもたらされる商品の相當多くが土宜として北上し、とりわけ江西・湖廣の商品が「全て」漕船隨帶の土宜として京師に運ばれていたことは注意されよう。

同様に、乾隆五十二年五月、倉場侍郎の劉秉恬は、「其の隨帶の土宜、亦た必ず源々として來らば、京城の食物、自らまさに日に平減に就き、騰貴を致さざらん」との諭旨を受け「江寧等の省の漕船に至りては、向例、土宜百二十六石を帶ぶるを準す。其中、食物・紙張・瓷器・糖・醋・油・酒・雜貨・竹木器等の項の如きは、均しく京師日用需要の物なり」と述べ、⁽⁴⁵⁾漕船土宜としての食糧は、京師の糧價を左右するほどであり、また食糧以外にも多様な商品が隨帶されていたことを示している。布疋絲線等の浙江地方の特産品が漕船土宜として運京されていたことが前の例によって知られるが、この例にいう紙張や糖・酒・竹木器の如きは、福建・浙江省の特産品の一つでもあった。これらもまた、北新關及び他關を土宜として免稅過關したものとされる。

一般に清代にあつては、約四百萬石前後の漕糧が六・七千隻の漕船で北上したとされている。土宜は全體で七十五萬石、船隻數では千隻前後にも相當する。この大量の部分、商品種目の如何を問わず、北京に至る經路に設置された複數關の徵課を全て免除されたのであるから、過關の度に一々課稅され陋規をも收奪された一般商貨に比すれば、壓倒的に有

利であったことは明らかであり、容積の割には高價な紬緞等が土宜として適切であるは言を俟たない。まして、杭州の紬緞が北京に至るまでの間、通過する關は主なものだけでも北新・潁墅・揚州・淮安・臨清・天津の六關に及ぶ。正税は小額であったにせよ耗羨や不定量の陋規等の收奪を考えれば、免稅土宜扱いが有利であったことは明白であり、利に聰い商人が漕船に土宜として附搭する理由は十分にあったといえるであらう。

なお浙江の漕運約三十萬石は、約千百隻を二十一幫に分けて行なわれていた。⁽⁴⁶⁾この土宜分で十三〜四萬石に相當する。しかし、この土宜部分のうち、杭絹がどれほどを占めていたかは知り得ない。

因みに、前引の『杭州市經濟調査』下冊、六 絲綢篇によると、民國二十年の杭州市の綢緞生産は五十五萬疋、本市で銷售されるものが六萬餘疋、輸出を含めて他に運銷されるものが四十三萬疋であった。五十五萬疋の綢緞生産のうち、四十二萬六千餘疋は在來型の生産方式による約三千戸の生熟貨の機戸によって生産されていた。なお、機戸生産分のうち三十七萬疋は、より高度の技術を要する「先染後織」の熟貨であり、熟貨機戸は省城内の專業機戸であった。また、生貨とは「先織後染」の紬緞を指し、省城近郊の農家が兼業として生産を行なっていたものである。生産高は四萬五千疋ほどであるが、機戸數は當時漸減しつつあったという。残りは零機料戸なる一種の間屋制前貸に類する形態での生産で、原料を綢莊から受領して織成を行ない、製品は綢莊に引き渡し出來高拂いで「工資」を受け取るもので、綢莊が在來型の生産から撤退しつつあるため、急速に減少している生産形態であるという。又、詳細は省略するが、同書によって杭州周邊及び近縣からの在來型の原料絲（土絲）の供給能力を推定すると約一萬二千擔となり、紬緞約四十萬疋に相當する。どの程度清代杭州の絹生産を考察するのに參考となるものかは、何ともいえない所であるが、少なくとも凡そ四十萬疋を、例えば五倍〜十倍といったほど著しく超えることは清代にあつては見られなかったのではないかと思われる。一應の參考としてあげた次第である。

結

征服王朝たる清朝が社會の安定に重大な關わりを持つ主要食糧につき、多大の關心を持つて作柄や天候、價格及び流通狀況等の情報を丹念に入手していた事はよく知られている。しかしながら、それ以外の一般商貨の國內流通の狀況については、それほど大きな關心は拂われて來なかつたように思われる。主要食糧と異なり、一般商貨の流通狀況が直ちに政情不安につながるものでないことから言えば當然かも知れない。その中で、乾隆年間に行なわれた關稅贏餘銀兩上年比較例は、その本來の關心が、國家の重要財源である關稅收入が、關の人的構成によつて中途で奪われることを防ぎ、國家がこれを最大限確保せんとしたことにあつたにせよ、結果的には關稅收入の減少の原因を追求することを通して、一般商貨の流通狀況の一端を窺うことを可能にしてくれた。もっとも、これには限度があり、各關の課稅對象となる商貨に限られ、しかも稅收が前年より減少した項目に限定されていたのである。しかしながら、この種の史料を關ごとに蓄積していけば、やがては全中國の規模の商品流通の實態を、概括的にもせよ把握することが可能になると考えられる。このような觀點から、潯墅關・淮安關の例をとりあげ、米豆を始めとする若干の商品の流通狀況につき、その數量的把握も含めて考察を行なつたことがあつた。

本論でも同様の視點から、大運河最南端に位置する杭州北新關を中心として、大運河・錢塘江という二大水路を用いて展開されていた商品流通の實態を明らかにせんとしたのであるが、これには大きな障害があつた。即ち、北新關稅則では、その地域的特性を配慮して主要食糧は全て免稅扱いであつて、贏餘短少關係史料にはまったく取り上げられることなく、加えて杭州の代表的產物たる絹類に對する關稅の稅率が、三十分の一という標準的稅率をはるかに下回つた百分の一程度であつて、北新關稅收を増減する主たる稅貨の役割を果たしていなかつたために、この種の史料には殆ど取り上げられなかつたからである。

税率が低く設定されていた理由は、恐らく明代以來の經緯をふまえたものと思われるが、基本的には、その全國規模での流通を容易にし、杭州の主産業に對する影響を少なくするといった配慮に基づくものと思われる。さらに京師に向かう商品北上の動きについては、漕船隨帶の土宜が大きな役割を果たしていたのであって、杭州の絹を始め浙江の諸產品が土宜として北上していたほか、江西・湖廣の商品に至っては、「全て」が漕船隨帶の土宜として運京されていたという。土宜として京師にもたらされた各地の商品は京師民間の日用の需要に應え、土宜としてもたらされた食糧は京師の食糧價格を左右したと言われるほどに重要な役割を果たしていたが、本論ではその一端に觸れ得たと思う。なお、大量の豆類等が南下する際に、回空漕船がその多くを擔ったことは間違いないであろう。

北新關稅收から見た場合、それを支えた主要な商品は、錢塘江水系によって販運される江西・福建等の產品であり、その主體は烟葉であり「五杭」といわれる五種の杭州の名品の一つの杭烟の原料をなしていた。⁽⁴⁷⁾因みに民國二十年ごろ、福建產烟葉の多くが海運されていたはずであるにもかかわらず、錢塘江を下って販運された烟葉は二萬五千擔を超えている。⁽⁴⁸⁾錢塘江水系を用いて、東南諸省に販運された商品としては、盛澤鎮や濮院・王庄の絹類もあったことが確認でき、杭州の絹も同様に販運されたものと思われる。錢塘江が東南諸省への孔道として、活潑な商品流通の經路としての役割を果たしていたことの一端が、以上により認められるであろう。なお、錢塘江水系の水運ならびに商品流通に關しては、他に若干の知見もあるが、別の機會に考察したいと考えている。

知り得た事は決して多くはないが、商品流通狀況を考察する場合、特に流通商品の量的把握を試みる場合、常關關係史料は必ずしも十分ではないにせよ、必要な史料の一つであるとは言えるのであって、今後はこの種の史料がより多く利用され、廣・狹域にわたる中國國內の商品流通の實態解明が進むことが望まれる。

註

(1) 例えば『明清以來北京工商會館碑刻選編』(文物出版社)

などにより、北京に設けられた各地方の商人の會館や、扱われた商品等について知ることができる。

(2) 海關を除く所謂常關制度は、まだ研究未開拓の分野であり、國內の研究も次の如きものに過ぎない。①「清代滄關の研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」『東北學院大學論集・歴史地理學』第三・五・一三・一四號、昭和四十八・五十・五十五・五十九年、香坂昌紀、②「清代における大運河の商品流通—乾隆年間、淮安關を中心として」同右 第一五號、昭和六十年、香坂昌紀、③「清代淮安關の構成と機能について」『九州大學東洋史論集』第一四號、昭和六十年、瀧野正二郎氏、④「清代の北新關と杭州」『東北學院大學論集・歴史地理學』第二號、平成二年、香坂昌紀、また關制一般については、⑤「清代における關稅贏餘銀兩の制定について」『集刊東洋學』第一四號、一九六五年、香坂昌紀、⑥「乾隆代前期における關稅主穀稅免除例について」『文化』第三二卷四號、一九六九年、香坂昌紀、⑦「清代前期の關差辦銅制及び商人辦銅制について」『東北學院大學論集・歴史地理學』第一一號、昭和五十六年、香坂昌紀、⑧「清代常關における包攬について」山口大學『文學會誌』昭和六十三年、第三九號、瀧野正二郎氏。

(3) 大清(康熙)會典・卷三四、同雍正會典・卷五二、(乾隆)會典則例・卷四七、(嘉慶)會典事例・卷一八七。

(4) 『史料旬刊』所收「彙核嘉慶一十七年各直省錢糧出入清單」

による。

(5) 葛士潯編『皇朝經世文續編』卷四七、戶政二十四、榷酤。

(6) 『中國近代手工業史資料』第一卷、第六章の四、(四)・一・「滄關」所收「清代鈔檔・康熙二十四年十二月初三日、巡視東城陝西道監察御史、吳震方謹題」、又、(2)の①—Ⅲ。

(7) 同右(二)・「安徽的情況」所收「清代鈔檔・順治八年十二月初一日、巡按江寧等處兼管屯田監察御史上官鉉謹題」又、通關業者については(2)の⑧參照。

(8) (2)の⑤參照。

(9) 宮中檔雍正朝奏摺・第一輯、刑部尚書托賴等、康熙六十一年十二月十七日、又拙論「清代の餽送—江蘇巡撫吳存禮を中心として」『東北學院大學論集・歴史地理學』第一六號、昭和六十一年、參照。

(10) (2)の①—Ⅲ・Ⅳ參照。

(11) (2)の①・②參照。

(12) (2)の④參照。

(13) 雍正九年序刊、北新關志、許夢閑撰、卷七「鈐轄」。

(14) 同(11)。

(15) (2)の⑤參照。

(16) 宮中檔乾隆朝奏摺・第四四輯、舒文、乾隆四十三年九月十七日。

(17) 同右、第一輯、浙江巡撫永貴、乾隆十六年七月十三日、又「清代中期の浙西における食糧問題」『東洋史研究』第四

九卷第二號、則松彰文氏 參照。

(18) (2)の④參照。

(19) 關稅辦銅については、(2)の⑦參照。

(20) 北新關志、卷一三「稅則」。

(21) 民國史料叢刊一二『杭州市經濟調查』 建設委員會調查浙江經濟所編、傳記文學社印行。恐らくこの地方では初めての本格的調査で、清代の様相を窺うに足る記述も多く、貴重なデータを提供してくれる。

右書、六、「絲綢篇」。

(22) (2)の④參照。

(23) 同(21)。

(24) (2)の④參照。

(25) (2)の④參照。

(26) 『清詩鐸』卷四「關征」所收。

(27) 北新關志・卷六「利弊」、卷五「法制」。

(28) 宮中檔乾隆朝奏摺・第二輯、浙江巡撫覺羅雅爾哈善、乾隆十七年三月七日。

(29) 同右、第三輯、同人、乾隆十七年八月一日。

(30) 同右、第九輯、申祺、乾隆十九年八月十二日。

(31) 同右、第三輯、梁詩正、乾隆二十一年正月二十六日、

又、(17)則松論文參照。

(32) 同右、第一六輯、杭州織造兼理南北新關稅務瑞保、乾隆二十一年十二月十六日。

(33) 北新關志・卷一四「船則」。

(34) 同(2)の①のⅢ・Ⅳ。

(35) 宮中檔雍正朝奏摺・第一輯、都察院左食都御史陳允恭、雍正元年十月二十四日、又、(17)則松論文參照。

(36) 宮中檔乾隆朝奏摺・第二四輯、杭州織造西寧、乾隆三十年四月十三日。

(37) 乾隆四十四年修・杭州府志・卷五三「物產」。

(38) 宮中檔乾隆朝奏摺・第二五輯、閩浙總督蘇昌、乾隆三十年八月二十四日。

(39) 北新關志・卷一三「稅則」。

(40) 乾隆元年重修・浙江通志・卷一〇二、「物產」嘉興府・「濮院紬」の項。

(41) 宮中檔乾隆朝奏摺・第一五輯、伊拉齊、乾隆二十一年九月二十六日、又、(2)の②參照。

(42) 同(21)。

(43) 宮中檔乾隆朝奏摺・第六七輯、成善、乾隆五十三年三月二十二日。

(44) 同右、第六一輯、徵瑞、乾隆五十一年九月二十四日。

(45) 同右、第六四輯、劉秉恬、乾隆五十二年五月十七日。

(46) 同右、第六三輯、浙江巡撫覺羅琅玕、乾隆五十二年二月三日、同書、第六五輯、兩江總督李世傑等、乾隆五十二年七月二十一日、同書、同輯、蘇陵阿、乾隆五十二年九月十九日、等による。

(47) 同(21)「商業編」八、日用雜物類。「五杭」とは、杭線・杭粉・杭扇・杭剪・杭烟の五名品をいう。

(48) 同右、四、「交通運輸篇」。

HANGZHOU AND COMMODITY CIRCULATION IN THE MID-QING PERIOD

—Especially focused on Beixinguan 北新關—

KOHSAKA Masanori

During the Qing period, many Native Custom-houses were established at the important traffic points along the main commodity-circulation routes such as the Grand Canal and Yangzi River, where duties and dues were levied on goods in circulation and craft in navigation. Beixinguan was one of these custom-houses, and located at the south end of the Grand Canal, in the north of Hangzhou city. The purpose of this paper is to search the functions of Beixinguan for some aspects of commodity circulation around Hangzhou.

The amount of revenue at this custom-house was not so much as that at Xushuguan 潯墅關 or Huaianguan 淮安關, because of the exemption from duties on rice, beans and so on, in order to cope with the recurrent famines in Zhejiang province. The major revenue item at Beixinguan was the duties on the Fujian-produced tobacco and on goods distributed through Qiantang River. On the other hand, silk as a noted product at Hangzhou, on which the rate of duties was fairly low, was not the main factor of fluctuating revenue at this custom-house. Although the amount of the silk in circulation, therefore, cannot be estimated through the investigation of the levies there, it seemed to be distributed partly to the southeastern provinces and mostly to the other ones and the capital through the Grand Canal. To be sure, the duties on the silk distributed to the North could not be exempted at several custom-houses in transit. However, such duties were often made exempted under the name of 'tuyi' 土宜, or annexed shipments sanctioned by the Government as a certain amount of duty-free goods on board caochuans 漕船, or grain transport ships.